

A21 講義室 【ライティング・その他】

- ⑤ **家庭の社会経済的背景(SES)が低くても英語力が高い学校の特徴—令和5年度全国学力・学習状況調査の分析結果から—**
 齊田 智里 (横浜国立大学)・佐藤 扶 (東京学芸大学連合大学院生)・渡邊 大志 (横浜国立大学大学院生)

区分:自由研究 対象:中学校

家庭の社会経済的背景(SES)と英語力との間には、弱い相関がある。全国学力・学習状況調査データを用いて、学校ごとに SES の指標を求め、英語科指導の在り方と生徒の学習意欲との関係を調べた。その結果、SES が低くても英語力が高い学校では、そうでない学校より言語活動が活発に行われており、生徒の学習意欲や理解度等が高いことが明らかになった。実際に学校訪問を行い、データの背後にあるそれらの学校に共通する特徴を見出した。

- ⑥ **中学生・高校生・大学生の主要ディスコースマーカ―の理解度に関する実態調査**

佐藤 選 (東京学芸大学)

区分:自由研究 対象:中学校・高等学校・大学

論理性的指導の観点から近年注目されているディスコースマーカ―について、日本人英語学習者におけるその理解度や傾向に関する分析結果を発表する。主要なディスコースマーカ―を 20 個抽出し、中学生から大学生まで計 2,400 名に、それらの意味を自由記述形式で問う調査を実施した。分析の結果、逆接関係・例示関係を表す表現の定着度が高く、因果関係を表す表現は so などの基本表現を含めて定着度が低いことが明らかとなった。

- ⑦ **学術論文におけるメタディスコースについて—書き手と読み手の視点から—**

福光 将仁 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究 対象:一般

本研究は、メタディスコース(以下 MD)について、2つの調査から書き手の使用と読み手の認識について調査した。調査1では、応用言語学分野の学術論文における MD 使用についてコーパス分析を行った。分析の結果、論文で頻出する MD を特定し、共起する表現と関連づけることで MD の用法について示唆が得られた。調査2では、発話プロトコルと事後インタビュー分析を通して、日本人英語学習者が MD をどう認識しているか検証した。

- ⑧ **Vocabulary Development Beyond Interference of Japanese Schema**

USUI, Yoshiko (Dokkyo University)

区分:自由研究 対象:大学

This study aimed to investigate how Japanese schema interfered with EFL students' written output. Data was collected at two occasions during AY 2023 from 90 first-year students (CEFR B1-B1+) at a university in Japan. They were asked to write a paragraph on a given topic in 15 minutes each time. The analysis focused on Level 1 and Level 2 words (New JACET 8000) such as "because", "fun", and "image", exploring the causes of misuse. The results implied that knowing the meaning of a word alone was not helpful in overcoming interference of Japanese schema. The presentation will conclude with some suggestions for an alternative approach to vocabulary teaching.

- ⑨ **論証型エッセイライティングにおける日本人 EFL 学習者の引用行動—引用プロセスと目的の観点から—**

清水 可奈子 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では日本人大学生が論証型エッセイライティングを行う際に、与えられた資料を読解し引用するプロセスと、引用の目的について調査した。参加者は二種類の新聞記事を読んだ上で、それらの情報を引用し論証型エッセイを書いた。発話プロトコルとインタビューデータをエッセイスコアと照らし合わせ分析した結果、書く前段階と実際に書いている段階における引用箇所選定プロセスに特徴があることがわかった。

- ⑩ **日本人英語学習者の日英作文におけるレトリック比較—説得型文章と説明型文章を用いて—**

土居 遼希 (成城大学学生)・細田 雅也 (成城大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究は、日本語を母語とする大学生を対象に日本語と英語の作文で使用されるレトリックの傾向と類似性を明らかにするために実施された。協力者は2種類の作文課題に基づいて計 4 題回答し、それらの結果を分析対象とした。独立変数は言語、作文課題の種類であり、従属変数は文構造である。結果は概ね先行研究と一致し、言語や文章タイプ間でレトリック使用が共通する傾向が見られたが、相違点も確認され、教育的示唆が与えられた。

⑤ 長期的に実践した口頭ランゲージングと筆記ランゲージングの学習効果

高木 哲也 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究

対象:高等学校

高校1年生を対象に、約5か月間に渡って30語程度の自由英作文課題を8回行った。生徒は、次時の授業内で教師から間接書記訂正フィードバックを受け取り、フィードバックに対して理由と修正案を説明するランゲージングに口頭または筆記形式で取り組んだ。プレ・ポストで実施した「英文法テスト」の得点と「自由英作文(60語程度)」の誤り数を基に、言語面の正確性に対する処遇の学習効果を分析した結果を報告する。

⑥ 英作文の質的分析による語数増加の要因の検証—CEFRのaction-orientedの観点を用いて—

工藤 洋路 (玉川大学)・根岸 雅史 (東京外国語大学)・投野 由紀夫 (東京外国語大学)・内田 諭 (九州大学)

区分:自由研究

対象:中学校

本研究では、中学生に一定期間を空けて同一の英作文課題を実施したところ、語数が倍増した。CEFRのaction-orientedの観点などから作文を質的に分析した結果、課題が設定するコミュニケーションの目的・場面・状況に応じる内容が増えたことが、語数増加の一つの要因であることが分かった。目的・場面・状況に応じることは、評価の観点の「思考・判断・表現」に関わるため、本研究から指導と評価の一体化への示唆が得られる。

⑦ 翻訳・添削ツールを活用したプロセスライティング指導が学習者に及ぼす影響

津久井 貴之 (群馬大学)・加藤 由美子 (ベネッセ教育総合研究所)・細井 夏木 (ベネッセ教育総合研究所)・

高木 亜希子 (青山学院大学)

区分:自由研究

対象:大学

大学1年教養英語で導入した翻訳・添削ツール(DeepL / DeepL Write)を活用したプロセスライティング指導モデルの影響を、アンケートや書かれた英文、インタビュー及び観察を通じて分析した。この指導モデルにより、学習者のツール活用への抵抗感が低減し、英文を自ら書く意欲と達成感が高まることが確認された。また、自力でのライティングと発表の段階を設定することで、高校英語授業への本モデル導入の可能性にも有益な示唆が得られた。

⑧ グラフィックオーガナイザー生成プロセスの比較に基づいた英文要約パフォーマンス

古川 祐太郎 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究

対象:大学

本研究では、グラフィックオーガナイザー(以下GO)が英文要約ストラテジーであることを前提とし、質の高い英文要約を書く日本人英語学習者のGO生成プロセスを検証した。参加者は、読解とGO生成時に思考発話を行い、GOを見て英文要約を書いた。分析は、Reading-to-Writeに関する枠組み(Plakans et al., 2019)を基に行った。その結果から英文要約時のGO指導について議論する。

⑨ 圧縮率の変化が日本人英語学習者の英文要約に与える影響—要約方略使用と原文使用から—

丹藤 慧也 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究

対象:大学

本研究では、英文要約の圧縮率(要約の語数/原文の語数)を変えた際の、日本人英語学習者の要約方略使用、原文使用について調査した。日本人大学生を対象に2つの英文テキストを読んでもらい、それぞれ異なる圧縮率(20%、40%、60%)で要約してもらった。なお、産出言語は英語であった。自由記述アンケートとそれぞれの圧縮率の要約から、圧縮率を変化させた際の方略使用、原文使用が圧縮率によって異なることが明らかになった。

⑩ 日本人大学生を対象とした技能統合型ライティングの実践と課題—「読んで書く」と「聞いて書く」要約タスクの比較—

大野 真澄 (慶応義塾大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究は「読んで書く」と「聞いて書く」という2種類の要約タスクにおけるパフォーマンスを比較調査した。日本人大学生70人が両タスクに取り組み、その要約は5観点からなる分析的評価尺度を用いて採点された。その結果、両タスク間で総合得点に有意差は見られなかった。しかし、「言語使用」の観点では「読んで書く」要約が「聞いて書く」要約よりも有意に高い得点であった。この結果を踏まえ、要約指導の方法と課題を議論する。

A23 講義室 【スピーキング・テスト・評価】

⑤ 意思決定タスクにおける学習者の発話機能比較—英語習熟度による違いを中心に—

村田 琴美 (北海道札幌市立丘珠中学校)・志村 昭暢 (北海道教育大学)

区分:自由研究 対象:大学

英語授業において、タスクを重視した指導が注目されているが、グループ内の学習者の L2 習熟度が異なる場合、タスク中の学習者の発話量や発話機能にどのような差がみられるのだろうか。本発表では、異なる習熟度の学習者を組み合わせたグループで意思決定タスクを行い、その際の発話量や発話機能について比較し、その特徴を明らかにした。

⑥ 指導法研究における効果測定方法に関する考察

小川 睦美 (日本大学)

区分:自由研究 対象:一般

本発表では、認知言語学の知見に基づく指導法研究において、効果測定方法の違いが効果サイズに及ぼす影響を考察する。具体的には、産出・理解課題など測定方法の種類や、指導及び練習活動と測定方法が一致するかが効果サイズに影響するのかを、メタ分析を通して検証した。その結果、測定方法による効果サイズの大きな違いは見られなかった。この要因について、個別の研究事例を取り上げながら議論する。

⑦ 高等学校教室内英語テストの分析—大学入学共通テストの波及効果及び観点別学習状況の評価の観点から—

大鋸 雄介 (東京学芸大学大学院生)・斉田 智里 (横浜国立大学)

区分:自由研究 対象:高等学校

2021 年施行の大学入学共通テストの波及効果を教室内英語テスト分析及び高校教員へのインタビューを通じて調査した。結果、リーディング指導と評価に一部影響が見られた。また、2022 年度の高等学校観点別評価導入に伴い、旧課程の教室内テストを新課程の観点に照らして分析した。さらに、新課程の教室内テスト分析及び作問者へのインタビューを通じて大学入学共通テストの波及効果と教室内テストの観点別評価導入による変化を調査した。

⑧ 大学入試英語における要約問題と技能統合型問題の変遷

渡辺 淳志 (大和大学)

区分:自由研究 対象:高等学校

大学入試問題は中高生の学習内容を規定する要因のひとつである。要約問題は英文を日本語で要約する形式に加え、日本語を英語で要約、あるいは英文を英語で要約する形式が現れた。一方、技能統合型問題は英語で解答したり、日本語で提示された英文の一部を英訳したりする形式に加え、英語長文を読んだ後に自由英作文を課す形式が現れた。これらの問題の歴史的な変遷と各形式の代表的問題を取り上げ、様々な角度から論じる。

⑨ 因子構造モデルの比較による Critical Thinking Test for English Education (CTTEE) の妥当性検証

久保 佑輔 (福岡大学)

区分:自由研究 対象:大学

日本の英語教育においても情報精査や多面的考察などの批判的思考力(CT)の育成や評価が求められている。そこで Kubo(2023)は英語教育の文脈に合わせた CT を測定する英語テストを開発した。探索的因子分析により妥当性が部分的に支持されたが、CT の理論的背景とは一部異なる構成概念が提唱された。本発表では、検証済みのテスト項目を対象に確認的因子分析を実施することで、CT テストの最適な因子モデルを明らかにすることを旨とする。

⑤ Effects of Random Selection Tests on Vocabulary Learning in Junior High School Students

KASAHARA, Kiwamu (Hokkaido University of Education)・NORISUE, Yuhu (Kitahiyama Junior High School, Setana, Hokkaido)

区分:自由研究 対象:中学校

Junior high students studied 30 vocabulary items and were tested under two conditions. Random selection tests covered 10 random items three times, while traditional tests assessed three different sets of 10 items. No significant differences in learning outcomes were observed between the groups.

⑥ 観点別評価は言語活動の評価デザインとして適切か

駒井 健吾 (長野保健医療大学)

区分:自由研究 対象:中学校・高等学校

現行学習指導要領のいわゆる観点別評価の「三つの柱」デザインは、中高英語教育の言語活動の評価規準および評価基準作成モデルとしても多く利用されているが、実際の評価における妥当性、信頼性はどの程度担保できそうなのか、また、フィードバックのしやすさなどの教育的有用性やルーブリック作成における実行可能性に関して、どの程度このデザインは効果がありそうなのか、他の評価モデルとの比較や SLA の知見を交えつつ検証した。

⑦ ルーブリックに基づく二値選択・境界定義(RBB)尺度の実用性検証—予備的研究—

飯村 英樹 (群馬県立女子大学)・高波 幸代 (群馬大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究は高波・飯村(2023)による「ルーブリックに基づく二値選択・境界定義(RBB)尺度」の実用性を検証する。RBB 尺度は、正確さ、英語らしさ、聞き取りやすさの 3 項目からなるルーブリックをもとに音読評価用尺度として作成された。教職課程を履修する英語専攻の大学生 11 名が 20 名分の音読評価に参加した。ルーブリックと RBB 尺度の評価結果を分析し、評価後の自由記述アンケートでは採点のしやすさについても回答を求め比較検証した。

⑧ Reading-into-writing タスクにおける相互評価の評価者トレーニングの効果—評価者信頼性とパフォーマンス変化の観点から—
久保田 恵佑 (福島県立医科大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では日本人大学生 48 名を対象にして、Reading-into-writing タスクの相互評価 (PA)において評価者トレーニングを実施し、その効果について調査した。評価者は複数の先行研究を参考にした以下の評価者トレーニングに取り組んだ:(1) PA の意義や注意点の学習、(2) タスクと評価基準の分析、(3) 採点例の分析、(4) 採点デモンストレーション。多層ラッシュ分析の結果から、Reading-into-writing タスクの相互評価と評価者トレーニングの有用性に関する示唆が得られた。

⑨ Comparing holistic ratings and analytical measures in video-conferencing direct mode versus human-to-machine semi-direct mode in a speaking test

SEKITANI, Koki (Toyo Eiwa University)

区分:自由研究 対象:高等学校

This study compared holistic ratings and analytical measures across two modes of a speaking test: video-conferencing direct mode and human-to-machine semi-direct mode, with the same participants. Results revealed higher holistic ratings and better complexity in the semi-direct mode, while accuracy and fluency were superior in the direct mode.

⑩ 学習者を対象にしたタクソミー・テーブル活用の検討

川井 一枝 (聖徳大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、一般的に指導者用として認識されるタクソミー・テーブルを学習者が使用する可能性について検討した。教職課程学生 121 名を対象に行った実践調査(計 4 回)の結果、タクソミー・テーブルを活用した振り返りでは概ね同じ傾向を示し、授業内の活動に伴う学習者の認知プロセスの違いを確認することが出来た。またタクソミー・テーブルを継続的に活用することで、学習者の内省力が深まる可能性が示唆された。

A25 講義室 【心理言語学】

⑤ 英文の読みやすさと読解に要する処理労力の関係—長文読解における視線計測データを用いた再検討—

名畑目 真吾 (筑波大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究は、英文の読みやすさと読解時の処理労力との関係を明らかにしようとしたものである。公開されている視線計測データの収集に使用された英文について、その読みやすさを複数の指標によって評価するとともに、読みやすさに関わる語彙や文などの特徴量を抽出した。それらと視線計測データの相関を分析した結果、読みやすさの指標によって関連の強さに違いはなかったが、特に語彙特徴と視線計測データに強い関連が見られた。

⑥ 視線計測によるリアルタイム代名詞解釈の検証—動詞の潜在的因果性と英文の展開を観点として—

細田 雅也 (成城大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究は、動詞の潜在的因果性が英文処理中、リアルタイムでの代名詞解釈に与える影響について、英文の展開を考慮に解明することを目指した。視線計測による実験の結果、潜在的因果性がリアルタイムで代名詞解釈に用いられるのは、英文の展開が接続詞によって明示される条件に限られ、展開が非明示の条件では、先行研究で観察された潜在的因果性の影響は見られなかった。第二言語処理に関する理論的、教育的示唆とともに議論する。

⑦ 学習者の黙読時における語強勢処理—読解時間の測定を通して—

佐々木 大和 (帝京大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究では、日本人英語学習者が黙読時に英単語内の強勢を処理しているかどうかを検証した。実験では、単語間に強い強勢同士が衝突する英単語の並び(deSIRE と BASKet)と衝突しない英単語の並びを日本人大学生が黙読し、その読解時間を計測した。分析の結果、日本人英語学習者の黙読時の語強勢の処理に関して示唆が得られた。その結果をもとに本発表では、学習者の黙読時の強制処理を含んだ音韻処理について議論する。

⑧ 会話やり取りにおいて、音韻ループ2秒以内に英語を英語のまま高速処理する授業とテスト—「やり取り」とは即解・即答を何往復もすること—

加藤 心 (北海道士幌町立士幌町中央中学校)

区分:自由研究

対象:中学校

本研究は、日本の公立中学校の生徒は日本語を介さずに英語を高速で処理ができるのかを検証する目的で行われた。日本語の翻訳ができないほどの高速の目安として、会話やり取りの中で2秒以上間を開けずに返答できるかを調査した結果、英語指導においても英会話テストにおいても両方で全ての中学生が2秒以上(平均0.8秒)の間を開けずに英語を高速で処理した。音韻ループ保持期間の高速処理は文字指導と4技能の統合につながる。

⑨ 意味情報の有無がリピート・タスクに及ぼす影響—脳血流量との関係から—

松原 緑 (名古屋大学)

区分:自由研究

対象:大学

大学生を対象に英語に加え、初見の未習外国語によるセンテンス・リピート・タスクを行い脳血流量の変化の違いがあるかを調べた。未習外国語には日本語訳を加える/加えないことで意味情報をコントロールした。結果、意味情報の有無に関係なく、一貫して右脳または左脳いずれかの脳血流の方がより活性化される人が多かった一方で、活性化される脳が左右に変化する人もいた。リピート再現率を分析に加えて学習方法について考察する。

⑩ 英語絵本読み聞かせ聴取時における小学生と大学生の脳活動の違い

大下 晴美 (大分大学)

区分:自由研究

対象:小学校

小学校3年生からの外国語活動および小学校5年生からの教科外国語科の導入に伴い、導入期における「英語絵本の読み聞かせ」が注目されている。本研究では、近赤外線分光法(Near-infrared spectroscopy:NIRS)を用いて習熟度の異なる小学生と大学生の英語絵本読み聞かせ聴取時の前頭葉の脳活動を計測した。その結果、小学生と大学生では、英語絵本読み聞かせ聴取時の前頭前野の賦活部位および賦活状況の差異が観察された。

- ⑤ 日本語を母語とする英語学習者による英語非対格動詞の過剰受動化の誤り—母語の影響に焦点を当てて—
岡村 明夢 (静岡県立大学)・白畑 知彦 (静岡大学)・須田 孝司 (静岡県立大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、日本語を母語とする英語学習者による非対格動詞の過剰受動化の誤り(*The accident was happened.)に、日本語がどのような影響を与えるのか調査する。先行研究では、英語に対応する日本語動詞の他動詞用法の有無が誤りに影響することがわかったが、非対格動詞の日本語への訳出が学習者によって異なる可能性も示唆された。本研究では、学習者に非対格動詞を含む文の日本語訳タスクを行い、日本語への訳出と過剰受動化の関係性を明らかにする。

- ⑥ 高校生の自由英作文に見る文法発達の様子

大田 悦子 (東洋大学)

区分:自由研究 対象:高等学校

高校生(37名)が1年/3年で同一トピック「自分にとって重要な人」について書いた英作文を量/質両側面から比較した結果を報告する。大田(2021)では高3時の英作文でも中3導入の文法(分詞、関係詞、現在完了、受け身)や後置修飾の使用例が限定的だったことを報告した。しかしそれは文法発達の停滞を意味しているわけではない。各生徒の1年-3年時の英作文を詳細に比較することで見えてきた様々な文法発達のパターンを紹介する。

- ⑦ How Practice Patterns Affect L2 Grammatical Knowledge of Japanese Middle School Students

ISHIHARA, Takeshi (Graduate Student, Kobe City University of Foreign Studies)

区分:自由研究 対象:中学校

Practice is a purposeful activity for developing second language knowledge and skills. This study compared the effects of grammar practice between blocked and interleaved schedules and found that the students' grammatical knowledge was more automatized through interleaved practice. This suggests that different grammatical items should be presented during the practice.

- ⑧ English Orthographic Knowledge of Japanese EFL Learners

KAWASAKI, Mariko (Nagaoka Sutoku University)

区分:自由研究 対象:大学

Japanese EFL learners' orthographic knowledge, essential for language acquisition, was investigated by a lexical decision task. Some nonword stimuli looked like real words while others did not. The nonwords orthographically similar to real words were more likely to be misjudged as real words which suggests that the participants possess certain English orthographic knowledge.

- ⑨ 決定木分析を用いた日本人英語学習者の冠詞習得順序の研究

高橋 俊章 (山口大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、Takahashi (2020) 及び Takahashi (2024) の研究に基づき、大規模なコーパスデータである ICNALE コーパスデータ(written essays)を用い、日本人英語学習者(大学生)の冠詞の習得順序を分析することを目的とする。決定木分析を使用して分析した結果、一般的言及かどうかを認識、その後特定かどうか、そして可算名詞と不可算名詞を識別する段階が続くことがわかった。

- ⑩ 日本語母語英語学習者の持つ動詞バイアスとインプットの関係性について

横田 和也 (ラ・サール高等学校)

区分:自由研究 対象:大学

英語母語話者は、個々の動詞がどのような構造を導きやすいかという情報を予測的文処理に利用している。動詞バイアスと呼ばれるこうした情報は、L2 学習者にとっても、流暢に英語を使用する上で重要だ。本研究は、英語学習者が動詞バイアスを習得しているか、またそれが英語学習者のインプットに基づくものかを明らかにするために、音声を用いた文完成課題を行い、その結果と英語教科書における構造の分布との関係を調べた。

A27 講義室 【リスニング】

⑤ **高校生による英語リスニングの自律的な学習—夏休み前後における学習行動と意識の変容—**

山内 優佳 (広島大学)・千菊 基司 (鳴門教育大学)

区分:自由研究 対象:高等学校

本研究の目的は、高校生の英語リスニングに関する学習行動やメタ認知的な意識について実態を明らかにすることである。夏休み前後にアンケート調査(MALQ, Vandergrift et al., 2006)を行った結果、(1) Problem Solving, (2) Planning and Evaluation, (3) Directed Attention の3要因についてメタ認知的意識に向上がみられた。また、夏休み前(1学期中)には教科書や教材をシャドーイングする学習行動が多くみられた。夏休み中には、限られた人数ではあるが、映画や動画配信サービスを英語で視聴する者が存在した。

⑥ **ライティング課題がリスニング力向上に及ぼす効果**

長谷川 修治 (植草学園大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究の目的は、学習作業に組み込んだライティング課題がリスニング力向上に及ぼす効果を検証することであった。そのため、2022年度と2023年度の両年度でリスニング力向上を果たした授業を例に、参加者合計40名を対象に11項目の5件法アンケートを実施して分析した。その結果、リスニング力とは一見無関係と考えられるライティング課題を行うことが、語彙力増強という点で重要な役割を果たしていることが示唆された。

⑦ **アニメの視聴を中心に展開する Four Strands を取り入れた実践—視聴とリスニング力向上の因果関係の検証を目指して—**

金山 幸平 (北海道教育大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、アニメの視聴と Four Strands 活動(meaning-focused input, meaning-focused output, language-focused learning, fluency development)がリスニング力向上に与える影響を検証した。大学1年生は毎週1本のアニメのエピソードを視聴して、その後エピソードに関連のある活動(ディクテーション、シャドーイング、リテリングなど)を14週間に渡って行った。実験前後にリスニングテストを行って、点数が向上した群と非向上群に分けて、その結果がもたらされた原因を後ろ向き研究手法を用いて検証した。

⑧ **The Effects of Watching Gestures and Lip Movements on L2 Listening Comprehension**

KAMIYA, Nobuhiro (Gunma Prefectural Women's University)

区分:自由研究 対象:大学

This study investigated the effects of watching a performer's body (gestures and lips are visible) and face (only lips are visible) against no visual information (audio only) on L2 English listening comprehension. The results showed that watching visual information facilitated comprehension, but the type of visual information did not affect the comprehension levels.

⑨ **Putting brackets around letters that correspond to inaudible stops: Does it help learners better identify words that contain them?**

SHIZUKA, Tetsuhito (Daito Bunka University)

区分:自由研究 対象:大学

Twenty-five Japanese university English majors, while listening to the first half of a CNN podcast, practiced placing brackets around letters corresponding to unreleased, and thus inaudible, stops. This improved their performance in identifying words containing such stops, as shown in their transcription of the second half of the same podcast.

⑩ **Effects of Online Interaction in English on Listening Ability**

SUZUKI, Tomohisa (Shizuoka Prefectural Shizuoka Johoku Senior High School)・SHIRAHATA, Tomohiko (Shizuoka University)

区分:自由研究 対象:高等学校

This study examines the effects of Online Interaction in English (OIE) with near-native speakers overseas on Japanese high school students' listening ability. A 25-minute OIE was conducted 16 times over an 8-week period. Analysis of Variance of standardized test scores showed that the students' listening ability improved significantly compared with student-student interaction.

⑤ 小中の英語検定教科書分析から見る食育の教科横断的な学びと小中連携の可能性

早瀬 沙織 (宮崎大学)

区分:自由研究

対象:小学校・中学校

文部科学省は学習指導要領において、学校教育活動全体を通じて食育を組織的・計画的に推進することを示している。食育は、家庭科や給食指導に限らず、教科横断的に児童・生徒が学べる機会を提供することが重要である。本発表では、小学校と中学校の英語検定教科書において、食についてどのような内容、活動が扱われているかを明らかにし、食育を英語でどのように教科横断的に学び、小中連携を図ることができるかについて検討する。

⑥ インターネーション指導についての中学校検定教科書分析

浅見 道明 (都留文科大学)

区分:自由研究

対象:中学校

中学校学習指導要領では「内容」の欄に「書かれたものを読む際にも基本的なインターネーションに関する知識を活用できるように指導する。」とある。そこで、インターネーションを書籍から調べ、定義を試みる。そして、実際に教室でどのようなインターネーション指導が行われているかを中学校教科書 18 冊を分析し、報告する。

⑦ 日本の英語教育教材の批判的分析—高校英語教科書を対象として—

長谷 尚弥 (関西学院大学)

区分:自由研究

対象:高等学校

本発表では、公平・公正な(バイアス・フリーな)英語教育のための教材の在り方を考える。その目的に資するため、諸外国の外国語教育理念や実践を参考に 2023 年 4 月より使用されている高校英語教科書「English Communication II」を批判的に分析する。言語や言語教育の本質的な在り方について考え、それを実現するための英語教育教材の在り方を模索するのが本発表の目的である。

⑧ 中高英語検定教科書における多義語の意味別頻度分析—get と see の語義分布に焦点を当てて—

早房 拓実 (千葉大学大学院生)

区分:自由研究

対象:中学校・高等学校

語彙知識を質的に増やすことは重要であり、深さの1つに多義性がある。学習者にとって教科書は貴重なインプット源であるが、教科書における多義語の複数の意味の頻度に関する研究は少ない。本研究では中高の英語検定教科書に頻出する多義動詞である see と get の語義の出現頻度を調査した。その結果、中心義の出現は see は半分以上である一方、get はほとんどないこと、主義の出現は see, get 共に語義によって偏りがあることが明らかになった。

⑨ 中高ギャップ解明のための教科書分析—中学既習文法事項の共起数とテキスト難易度の関係性—

白倉 美里 (東京学芸大学)・田中 広宣 (東京大学)

区分:自由研究

対象:中学校・高等学校

本研究では「中高ギャップ」解決の糸口を探るために、中 3 と高 1 の教科書本文の難易度を CVLA(内田・根岸, 2021)を用いて分析し、その結果を中学既習文法事項が一文に複数出現する現象(中学既習文法事項共起)を調べた先行研究の結果と比較考察した。その結果、中 3 と比べて、高 1 のほうが CEFR レベルが上がる事が確認され、中学既習文法事項の共起数とテキスト難易度の関係性がうかがえた。

⑩ 学習者向け英字新聞に出現する重要語に対する語彙リストによる対応の違い—CEFR-J と新 JACET8000 の比較—

八島 等 (広島文教大学)

区分:自由研究

対象:一般

昨年、CEFR-J の収録語が学習者向け英字新聞でどの程度用いられているのかを調査すると、収録語以外の語が約 13-14%あった。そこで今年は昨年と同じ英字新聞を新 JACET8000 で調査すると、収録語以外が約 9-10%あり、新 JACET8000 の有効性にも疑問が残った。但し、CEFR-J の収録語以外の語で、LDOCE 最重要語上位 6000 語以下の 16 語はすべて、新 JACET8000 に含まれていた。

A31 講義室 【学習者】

⑤ **L2 作文の特性を規定するのは母語か地域か—アジア圏 15 地域の学習者の統計的分類—**

石川 慎一郎 (神戸大学)

区分:自由研究

対象:大学

アジア圏学習者の英語作文の差の要因を探るべく、ICNALE 拡張モジュールを用い、15 地域の学習者(習熟度は B1 に統制)の作文を上位 50・100・200 語を変数として分類した。その結果、アルバイト課題では ESL/EFL に二分されるが、喫煙課題では旧英領インド圏、日韓、その他に分かれることが示された。このことは、欧州の学習者コーパス研究が前提とする母語別分類がアジアの文脈に適用できない可能性を示す。

⑥ **英語授業の好き・嫌いの変化とその理由—小学校で英語が好きだった児童が中学校で英語が嫌いになるのは本当か?—**

及川 賢 (埼玉大学)

区分:自由研究

対象:小学校・中学校

2017 年に学会誌で発表した研究の追試。「小学校時は英語が好きだったが中学校時は英語が嫌いになる生徒が多い」という言説の真偽を調べる。952 名の中学校 2 年生を対象に英語の好き・嫌い及びその理由をアンケートで尋ねた。2017 年版では上記の言説が必ずしも正しくないことを示したが、教科化と低学年化を経た現在も同様の傾向が見られるか調査する。回答から因子分析を用いて共通項を抽出し、要因間の有意差を分散分析で確認する。

⑦ **高校生と大学生の周辺にある題材に対する興味**

飯田 毅 (同志社女子大学)・上野 裕子 (京都府立木津高等学校)・高尾 海沙 (福岡県立中間高等学校)

区分:自由研究

対象:高等学校・大学

本研究の目的は英語教育における高校生と大学生の題材に対する興味の調査にある。題材は学習指導要領や研究者の間で議論されてきたが、学習者の題材に対する興味を調査した研究は少ない。題材への interest はその語源が示すように学習者と教師の間にある。本研究では現代を「分断と対立」というキーワードで捉え、高校生・大学生の課題解決のための題材への興味、学問分野への興味、題材の構成についての興味を調査する。

⑧ **高等学校における一般生と帰国生の自己肯定感に関する比較**

望月 恵理 (東京学芸大学教職大学院生)

区分:自由研究

対象:高等学校

高等学校における一般生と帰国生の自己肯定感の差について、一般生 12 名、帰国生 5 名の計 17 名の生徒を対象に、平石 (1990)の6つの領域に基づいて質問紙とインタビューを実施した。その結果、帰国生は一般生に比べて特に「自己表明・対人的積極性」の領域が高い傾向にあった。また、その領域に正の影響を与えた経験として、意見を聞き入れてもらえる受容的なコミュニティにいたことが重要な要因となっていることがわかった。

⑨ **ケアによる言語不安研究の展望—英語教育実践への更なる貢献を目指して—**

杉原 颯太 (京都大学大学院生)

区分:自由研究

対象:一般

言語不安の特性を解明した言語不安研究(例えば Piniel, 2024)は教育実践に確実に貢献している。だが、その貢献は学習者の「ケア」中心であり、「ケア」(Gkonou&Miller, 2019)の側面が軽視されている。ケアは学習者そのものの理解を目指し、学習者の価値観を尊重し学習者の自然な変化を促す。本発表はケアの観点から言語不安研究を理論的に総括する。言語不安研究がさらに実践的になるためには、ケアの観点から学習者そのものにより注目するべきだ。

⑩ **Factors contributing to learner silence and active engagement: A complexity theory perspective**

YAGATA, Katsuhide (Kobe City University of Foreign Studies)・YAGATA Stephanie (Kobe City University of Foreign Studies)

区分:自由研究

対象:大学

This presentation describes factors that contributed to a change from learners' L2 silence toward active L2 engagement in English conversation during a year-long language teacher education course. Drawing on a qualitative analysis of students' descriptions of their experience across the year, practical implications for English teaching will be discussed.

⑤ 筆記ランゲージングの効果—誰に向けて行くと効果的なのか—

石川 正子 (城西大学)・鈴木 渉 (宮城教育大学)

区分:自由研究

対象:大学

学習者が疑問に感じたことを書く「筆記ランゲージング」は効果が検証されつつあるが、そのメカニズムの解明は十分ではない。本研究では、本試と追試を行い、大学生に、冠詞の用法を自分自身(自己群)又は、他者(他者群)に説明するよう求め、その前後にテストを実施した。本試では他者群が自己群よりも成績を伸ばし、追試では両群に差は見られなかった。本発表では、これらの結果を先行研究に基づき議論し、教育的示唆も述べる。

⑥ 中学校外国語科における授業振り返りシートの分析—自己調整学習の理論を踏まえて—

井上 小百合 (東京学芸大学大学院生)

区分:自由研究

対象:中学校

本研究は自己調整学習の理論に基づき、中学生が授業内で振り返りを行う際にどのような観点の気づきを得ているのか、またどのような学習の見通しを立てているのかを明らかにすることを目的に、中学2年生の1単元分の授業の振り返りの記述をテキストマイニングで分析した。その結果、明示的に指導した内容や授業中の感情を多く記述しており、気づきを基にさらなる学習方法を記述することができていることも分かった。

⑦ 日本人高校生の英語学習における情意要因に関する実証研究—学習者信念とL2可能自己、WTC、動機づけとの関係性—

綱澤 えり子 (大阪大学大学院生)

区分:自由研究

対象:高等学校

本研究では、日本人英語学習者を対象として、動機づけ、L2可能自己、学習者信念、コミュニケーションへの積極性について質問紙調査を行った。大阪府立高等学校に在籍する全校生徒を対象として、質問紙調査を2021年秋に実施し、890名が調査対象者となった。データの分析には記述統計、クラスター分析、多変量分散分析を用い、主な結果として、3年生の信念と努力が他の学年と比較して高い傾向にあることが明らかとなった。

⑧ 英語学習における動機減退要因と非エンゲージメントの関係性

鈴木 洋海 (明治大学大学院生)

区分:自由研究

対象:高等学校

本研究の目的は、英語学習における動機減退要因(難しかった経験、教師の行動、授業環境、興味の損失)と非エンゲージメント(行動的、認知的、感情的)の関連性について検討することである。日本で英語を学ぶ高校生432名を対象に質問紙調査を実施した。分析の結果、教師に関する要因よりも学習者自身に関する要因の方が非エンゲージメントと強い関連を持っていた。以上を踏まえ、教育的示唆について言及する。

⑨ 大学生英語学習者の主体的なアウトプットを引き出すピア・フィードバックの活用

田中 裕実 (静岡県立大学)

区分:自由研究

対象:大学

本発表は英語コミュニケーション系一般教養科目の一部を用いた授業実践報告である。英語プレゼンテーションの練習段階で、動画撮影による自己内省活動と、グループによる他者評価、ピア・フィードバックを生かした反復演習を組み込んだ。学習者の活動記録や動向観察をもとに、学習者自身が自らのアウトプットのどのような部分に特に気づきがあり、変化をもたらすのか、学習者傾向の分析を行ったことについて述べる。

⑩ 個人差要因として学習者の外向性特性は本当に重要ではないのか?—外向性、ジェネリックスキル、学習者方略の関連性について—

若本 夏美 (同志社女子大学)

区分:自由研究

対象:大学

大学生132名を対象とした調査研究結果を報告する。3種類の質問紙(MBTI、PROG、LCS-J)を使用し、性格(特に外向性・内向性特性)、ジェネリックスキル(汎用的能力・態度・志向)、およびリスニング方略(学習・使用時)を調査し、それらの関係性を分析した。発表では、結果をもとに授業および授業外学習での自己最適学習方略(Best-Fit Strategy)の発見と活用方法を議論する。

A33 講義室 【リーディング】

⑤ チャンクに着目した読みのトレーニングとワーキングメモリ容量の関係性

浅井 智雄 (福山平成大学)

区分:自由研究 対象:大学

読みのプロセスにおける情報の処理と保持が常時、併存的に行われるような一時的な記憶であるワーキングメモリ(Daneman & Carpenter, 1980)は、読みの効率化に大変重要な役割を果たす。本研究では、非英語専攻大学生を対象として、英文のチャンクに着目した読みのトレーニングとワーキングメモリ容量の変動を検証した。トレーニングの前後に実施したリーディングスパンテストの成績を複数の観点から統計的手法を用いて比較分析した。

⑥ デバイスの違いが英文読解に与える影響

長嶺 藍李 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、パソコンとスマートフォンが日本人大学生・大学院生の英文読解の理解度に与える影響について調査した。参加者はパソコンとスマートフォンにて英語の不要文削除問題に解答し、その後各デバイスを用いた読解における理解度や快適さについての認識を問うアンケートに回答した。テストとアンケートの結果から読解パフォーマンスと快適さの関係性を探り、英文読解における効果的なデバイス利用に関する示唆が得られた。

⑦ 大学生英語学習者が文学的物語文読解時に経験する困難点

西原 貴之 (広島大学大学院)

区分:自由研究 対象:大学

EFL 学習者にとって文学作品は一般に難しい教材であると考えられてきた。しかしながら、読解時に学習者が経験する具体的な困難点はこれまで実証的に研究されていない。本発表は、文学的物語文を主教材とした一般英語授業の中で、大学生に読解時に経験した困難点を報告してもらい、そのバリエーションを分析した結果の報告である。本発表では、さらに文学的物語文使用時の指導上の留意点についても検討したい。

⑧ オンライン調査で収集した読解速度データの妥当性—対面実施による速読との比較から—

田中 菜採 (日本大学)

区分:自由研究 対象:大学

コロナ禍では多くの調査研究がオンラインで実施された。本研究では、読解速度の測定がオンラインでも妥当性があるかを検証した。昨年度の研究大会で発表したオンライン調査のデータを再分析し、新たに収集した対面実施でのデータと比較し、内容理解問題の種類によって速読活動が影響されるかを検証した。この結果、オンラインと対面実施で読解速度に多少の違いがみられたが、内容理解問題の種類による読解速度の傾向は同じだった。

⑨ Stoller 博士と Grabe 博士のリーディング・ガイドに基づいたリーディング指導の提案

種村 俊介 (金城学院大学)

区分:自由研究 対象:高等学校

発表者はノーザンアリゾナ大学に客員研究員として滞在中に Stoller 氏と Grabe 氏によるリーディングのモデル授業を受ける機会を得た。教材のリーディング・ガイドのタスクは、多様なリーディング・ストラテジーの使用や談話構造に対する気づきを促し、英文理解が深まるように工夫されていた。本発表では、両氏のガイドを基に作成した高校教科書の英文のリーディング・ガイドを紹介し、タスクに取り組むことで学習者が得られる学びを考察する。

⑩ 大学入学共通テストの英語(リーディング)は何をどのように問っているか—ジャンル準拠リーディングの観点からの考察—

今井 理恵 (新潟医療福祉大学)・松沢 伸二 (新潟大学)・峯島 道夫 (新潟県立大学)

区分:自由研究 対象:高等学校

本発表は大学入学共通テストの英語(リーディング)は何をどう問っているかについて、ジャンル準拠リーディング指導(genre-based reading instruction, GBRI)と評価(assessment, GBRA)の観点から考察し、改作案を提案する。英語(リーディング)のテストの「出題教科・科目の問題作成と方針」・文章・設問の実際を、ジャンルのプロトタイプやジャンル正対課題に照らして評価する。

⑤ 日本人大学生の英語派生語知識の実態調査

森田 光宏 (広島市立大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究は、大学1年生の英語派生接辞に関する知識を形式、意味、統語の3つの側面で調査した。結果として、統語について最も高い知識を持っていること、そして、形式と統語は大学入学前の学習からわずかながら正の影響を受けていることが分かった。また、1年次の初めと終わりの比較では、統語側面のみが伸長を示した。これらの結果から、英語派生辞学習・指導への示唆を提示する。

⑥ 千葉県公立高校入試英語リーディング分野と中学校英語教科書の語彙分析—語彙の重なるの観点から—

若松千智 (千葉大学大学院生)

区分:自由研究

対象:高等学校

本研究の目的は、公立高校入試の読解問題と教科書全て、本文のみのコーパスにおける語彙カバー率の差を明らかにすることである。中学生にとって初見問題である公立高校入試を使用し、Tokens(総語数)、Types(異語数)をもとに調べると、授業内で主に扱われる本文のみの語彙では入試問題のカバー率が約80%台であることが判明した。公立高校入試で使われている語彙を理解するには小学校の語彙や授業外で学ぶ語彙が必要であると言える。

⑦ 高等学校英語教科書の語彙的分析—共通語・特徴語・小中英語教科書との比較から見る高等学校の指導語彙—

佐藤 剛 (弘前大学)

区分:自由研究

対象:高等学校

学習指導要領において高等学校では1,800語～2,500語が扱われるとされている。しかし、使用する教科書が異なっても高校生が共通して学習すべき語彙が具体的にどのようなものかは明らかにされていない。本研究は高校1～3年生用の英語コミュニケーションおよび論理表現の検定教科書の出現語彙データから、共通語・特徴語の分析、小・中学校の語彙リストと比較することで高等学校における効果的な語彙指導の在り方を検討するものである。

⑧ 高校生に対する英語語彙学習を促す体験講座—記憶の認知メカニズムと方略の段階性に着目して—

市川 伸一 (東京大学名誉教授)・木澤 利英子 (帝京大学)

区分:事例報告

対象:高等学校

従来、高校生の英語語彙学習については、生徒から抽出した項目をもとにした質問紙研究が多くなされてきた。本研究では、認知理論から見て、項目を段階的に構造化したモデルを設定して、高校1年生が学校で小テスト課題として使っている市販単語集を素材に、いろいろな処理水準の学習方略を体験する講座を実施した。それぞれの方略につき、従来の使用状況と今後の使用意思の評定を求めたところ、多くの項目で上方へのシフトが見られた。

⑨ 日本人中学生への語彙指導—接頭辞に焦点を当てて—

神宮 里奈 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究

対象:中学校

本研究では、接頭辞に焦点を当てた語彙指導の効果を検証した。中学2年生を接頭辞に関する指導を行う実験群と統制群に分け、指導前後に選択式テストを行った。ポストテストの後、語彙サイズテスト及び質問紙調査を実施した。テスト結果について共分散分析をしたことで、接頭辞の指導は効果的だと判明した。また、語彙サイズの大きい中学生ほど指導効果が顕著であり、参加者は接頭辞の指導を肯定的に捉えていると明らかになった。

⑩ 日本人 EFL 小中学生に対する CNRep の項目分析—多相ラッシュモデルを用いて—

佐久間 康之 (福島大学)・高木 修一 (福島大学)・横内 裕一郎 (福島大学)

区分:自由研究

対象:小学校・中学校

本研究では小学校外国語活動を経験した日本人小学5年生及び中学1年生に実施した英語の非単語反復である The Children's Test of Nonword Repetition (以下 CNRep) の項目分析を行った。CNRep は英語母語話者および EFL 学習者の語彙習得を予測する指標として用いられている。主な結果として、非単語の第一アクセントの位置が項目困難度に影響していることが明らかとなった。これらの結果を、母語からの負の干渉及び短期記憶の認知資源の観点から考察した。

A35 講義室 【動機付け】

⑤ 多読を支える活動と自己決定理論

竹村 雅史 (北星学園大学短期大学部)・廣森 友人 (明治大学) 区分:自由研究 対象:大学

自己決定理論では、内発的動機が高まる 3 要素(自律性、有能性、関係性)が充足されれば、学習者は学習課題に積極的に取り組むと言われている。多読の魅力は読みたい本を自ら選び(自律性)、選んだ本を読み切り(有能性)、他者と一緒に読書する(関係性)学習活動なので、多読と自己決定理論との親和性は高い。多読本来の受容的活動とそれを支える多読の産出的活動と自己決定理論との関係を今回は探ってみた。

⑥ Task-Supported Activity が学習者に及ぼす効果—学習者要因との関係性—

鈴木 智己 (旭川工業高等専門学校)・櫻井 靖子 (旭川工業高等専門学校)・津波 聡 (沖縄国際大学)・
山川 満夫 (沖縄国際大学) 区分:自由研究 対象:高等専門学校

動機づけ減退傾向が見られる高専3年生のクラスで PPP 型授業と Task-Supported Language Activity などの活動を折衷的に用いた授業を行い、動機づけ、不安要因、海外に対する指向性、WTC といった個人差要因にどのような影響が見られるか検証した。その結果、動機づけについてのみ負の影響が見られた。記述式アンケートとインタビューで得られたデータによる質的分析についても報告する。

⑦ 心理的安全性と学習者エンゲージメントの関係

森谷 浩士 (岡山大学) 区分:自由研究 対象:大学

本研究では、心理的安全性と学習者エンゲージメントの関係を量的に検証した。心理的安全性とは率直な意見、疑問、アイデア等を発言しても他者から否定的な反応を受けないと思える環境のことであるが、英語教育ではない大学教育の文脈では、心理的安全性が日本人大学生の学習者エンゲージメントに好影響を与えることが報告されている。本研究ではこの関係性を大学英語教育の文脈で追試したが、先行研究とは異なる結果を得た。

⑧ 日本の高校生における英語学習への動機づけ・エンゲージメント・学習意欲減退要因の関係性

明日 海斗 (横浜国立大学大学院生) 区分:自由研究 対象:高等学校

本研究は、日本の高校生を対象に英語学習に対する動機づけ・エンゲージメント・学習意欲減退要因の関係性を質問紙調査によって調べたものである。分析の結果、高校生の動機づけは中学生と比べ外発的であること、エンゲージメントと学習意欲減退要因には負の相関がみられることなどがわかり、クラスター分析の結果、動機づけの高位・中位・低位群に加えて高エンゲージメント群の存在が示唆された。

⑨ 東京学芸大学「英語集中演習」における参加者のエンゲージメント

小松 彩菜 (東京学芸大学教職大学院生) 区分:自由研究 対象:大学

本研究では、東京学芸大学で実施された夏期英語集中演習における参加者のエンゲージメントの実態と要因について参加者 2 名と Teaching Assistant 1 名に対し、インタビューを行いその発言を行動・感情・認知・社会の 4 つの軸に基づき分析した。結果、主に参加者の興味や強みに合致した活動、協働場面のある活動、普段体験できない新鮮味のある活動、自立的な学びあいを促す TA の支援などがエンゲージメントを促進していることが明らかになった。

⑩ 英語学習経験の語りから捉える学習者エンゲージメント

三ツ木 真実 (小樽商科大学) 区分:自由研究 対象:大学

個人の過去の学習経験が現在の学習に向かう態度の形成や学習への継続的なエンゲージメントに影響することが知られている (Reschly & Christenson, 2012)。しかし、どういった言語学習経験が学習者のエンゲージメントを喚起したのか、また促進しているのかといった点は研究の余地が多い (Hiver et al., 2020)。本研究では、一人の英語学習者の語りを通じて、個々の学習文脈で得られた経験や認識がエンゲージメントとどう関わっているのかを分析した。

⑤ 公立高校における一人一台端末をフル活用する英語授業実践

真島 由朱 (大阪府立桜塚高等学校)

区分:自由研究

対象:高等学校

GIGA スクール構想第 2 期を見据え、この実践発表では 2023 年度に『英語コミュニケーションII』で行った一人一台端末と Google for Education をはじめとした ICT ツールを使用した授業実践、ツールを使った匿名性の高い交流が生徒にどのように影響を与えたかについて発表する。また、オンラインベースで行ったことについての利点や、今後の学校における外国語教育のメリットについても考えたい。

⑥ E-learning の利用率を高めるために一ログを利用して

小西 瑛子 (常磐大学)

区分:自由研究

対象:大学

大学等の教育機関で、e-learning を導入しているところは少なくない。だが、本当に利用されているのだろうか。対象となった大学では、成績の一部に組み入れられてはいるものの、学生の自主性に任されており、その利用率はあまり高くない。本研究はそれを高めるための実験的な取り組みである。

⑦ Computer-Based Testing を用いた技能統合型ライティング評価タスクの開発

新美 徳康 (広島大学大学院生)

区分:自由研究

対象:中学校

本研究では、Computer-Based Testing (CBT)の利点を受験者の解答に応じた即時的な支援の提供と捉え、CBT による技能統合型ライティング評価の開発に取り組んだ。開発した支援を組み込んだ CBT と、比較対象として支援無の CBT の 2 種類を用意し、公立中学校 3 年生 3 クラスに実施した。提出されたライティングをループリックを用いて得点化し、出題方法間で比較した。本発表ではその結果を示し、生徒の学習・教師の指導に繋がる CBT を用いた評価手法を提案する。

⑧ 機械翻訳による和文英訳の精度の検証ならびに英語教育への示唆

馬場 哲生 (東京学芸大学大学院)

区分:自由研究

対象:一般

馬場(2020)は、2020 年 3 月時点の Google 翻訳及びポケットトーク S を用いて様々な構造の日本語文を英訳させ、訳出の正確さを検証し、馬場(2022)は、2022 年 11 月時点での Google 翻訳及び DeepL を用いて、それぞれの和文英訳の精度を検証した。本発表では Google 翻訳、DeepL、そして生成 AI "ChatGPT" による和文英訳の精度を検証するとともに、英語教育への示唆を考察する。

⑨ 反転授業における社会文化的側面への認識に関する研究

仲川 浩世 (大阪女学院大学・大阪女学院短期大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究の目的は、学習管理システムである Google Classroom を用いて、リーディングの題材に日本文化の概念を扱い、反転授業を実施し指導後の学習者のインタビューが示唆することを探るものである。本研究では、私立短期大学生の 4 名の調査協力者のインタビューデータを質的にコード化したところ、社会文化的側面に対する認識が、英語コミュニケーションにおける自信に対して肯定的な影響を与えると分かった。

⑩ 高等専門学校での学習者における自己決定理論を活用した英語ディベート授業の効果—心理的欲求と英語学習動機づけへの影響—

寺嶋 宏樹 (豊田工業高等専門学校)

区分:自由研究

対象:高等専門学校

英語教育の重要性が増す中、学生の英語学習動機づけの低下が課題である。本研究では、高等専門学校の学生を対象に、自己決定理論と英語ディベートを組み合わせた教育的介入の効果を検証した。研究の結果、教育的介入が学生の一部の心理的欲求と英語学習動機づけに影響を与えることが示唆された。しかし、全ての欲求や動機づけには影響を与えないことが明らかになった。今後の研究では、さらなる要因や介入方法の検討が必要である。

A37 講義室 【ICT・CALL・AI】

- ⑤ 英単語間の結びつき度を高めるオンライン語彙学習プログラムの開発とその効果検証—名詞版、形容詞版、動詞版の比較—
折田 充 (熊本大学)・小林 景 (慶應義塾大学)・相澤 一美 (東京電機大学)・吉井 誠 (熊本県立大学)・

Richard Lavin (熊本県立大学)

区分:自由研究

対象:大学

英語語彙知識における単語間結びつき度を高めるための自律型オンライン語彙学習プログラムの開発に取り組んだ。教養英語教育半期での活用を念頭に、名詞・形容詞・動詞それぞれについて12ユニット版を作成した。各プログラムにCEFRでA2・B1レベルの3群の異なる大学生に組み合わせた。12週間後、すべての群で結びつき度は有意に高まったが、事前・事後間でそのばらつきも変化し、様相は学習者群で異なった。

- ⑥ 生成AIを活用した協働学習による批判的思考力の育成

佐古 孝義 (明星大学)

区分:事例報告

対象:大学

本研究は、教員志望学生がAIを含むICTを用いた英語CM制作を行う協働学習において、生成AIが果たした役割を調査したものである。協働学習を促進する生成AIの効果が確認された一方、制作の進捗の管理や言語スキルの評価に課題を残したことが明らかになった。本研究は、デジタルリテラシーと批判的思考を育むために生成AIの活用を教員養成に組み込むこと及び生成AIを利用した協働学習における注意点について提言を行う。

- ⑦ 生成AIとLangChainによる「ヴァーチャルAI中学生」の開発と検証—大規模言語モデル(LLM)の活用とSentence-BERTによる可視化(自由記述三次元可視化アナリティクス)—

金子 淳 (三重大学)・山口 常夫 (東北文教大学)・サコラヴスキー・ジェシー (三重大学)・

庄山 大樹 (三重大学教育学部附属中学校)

区分:自由研究

対象:中学校

中学生の英語力向上には言語活動の充実が望まれる。しかし教員の指導力、ALTの数、限られた予算により難しい。企業が提供するAIアプリを導入する試みもあるが、やりとりが拙く、表現が難しく、費用もかかる。この問題を解決するため、現在最も注目されている生成AIとLangChainを用い、中学生と等身大の自然なやり取りをする「ヴァーチャルAI中学生」というWebアプリを安価に開発、検証を行い、有用性と効果を確認した。

- ⑧ 自動採点を前提とした学内版英語スピーキングテストの開発と予備的試行

望月 正道 (麗澤大学)・千葉 庄寿 (麗澤大学)

区分:自由研究

対象:大学

英語学習者のスピーキング能力を測定するためには、パフォーマンステストを実施することが不可欠であるが、それには時間的、人的、金銭的などさまざまな制約が伴う。AIによる自動処理を援用し、英語スピーキング能力を自動採点するシステムを開発することは、そのひとつの解決策になると考えられる。本研究は、採点をすべて自動で行うことを前提に、Versantを模倣したスピーキングテストの開発を試みる予備的研究である。

- ⑨ AI採点型スピーキングテストに対する日本人高校英語教員の反応—校内テストの1形態として—

小泉 利恵 (筑波大学)・印南 洋 (中央大学)

区分:自由研究

対象:高等学校

AIを用いた様々なスピーキングテスト(ST)が開発され、テスト実施や採点が技術的に可能になる中、AI型STに対する英語教員の反応を調べることは、今後の方向性を探るために必要である。本研究は、AI採点型STのSpecchaceを受験した20名の日本人高校英語教員の反応を調べた。80%が本テストで「タスクを設定し、テストを授業内で実施し、成績評価に入れることは可能だ」と考え、その魅力や懸念点を記述した。発表時に結果を報告する。

- ⑩ 生徒が英語学習において機械翻訳や生成AIを使用することに対する教師の抵抗感

鬼沢 史弥 (東京学芸大学大学院生)

区分:自由研究

対象:中学校・高等学校

本研究では機械翻訳・生成AIに対する英語教員の考え方について明らかにすることを目的として、生徒が機械翻訳・生成AIを活用して学習することへの抵抗感及び生徒への指示だしについて自由記述を交えたアンケート調査を行った。結果としてはほぼ全ての指導場面において英語教員は生徒の機械翻訳・生成AIの使用について抵抗感を抱いており、指示だしについても使用を禁止するか、もしくは何も伝えていない場合が多いことが分かった。

⑥ 「新出文法」との導入後の出会い—中学校英語教科書における出現頻度分析—

星野 由子 (千葉大学)・田村 岳充 (宇都宮大学)・白倉 美里 (東京学芸大学)

区分:自由研究 対象:中学校

中学校英語教科書では新出文法が各単元に配され、そこで意味や用法、構造などを学ぶ。しかし、習熟・定着するためには、それらに繰り返し出会うことが必要となる。そこで本研究では、新出文法が導入された後、生徒がそれらにどの程度遭遇するのかを調べるため、to 不定詞、比較、受動態、分詞の形容詞的用法に着目し、タイプ頻度とトークン頻度を算出した。その結果、文法項目によってその後の出会いの数の差があることが分かった。

⑦ 日本人大学生による受動態の誤り—態判断課題を用いて—

岡田 美穂子 (金城学院大学)

区分:自由研究 対象:大学

英語学習者はしばしば自動詞の過度受動化の誤りを犯すことが指摘される。本研究では自動詞の種類(非対格・非能格動詞)、英語の熟達度、主語の有生性の3要因に焦点を当て、日本人大学1年生約130人を対象に態判断課題を用いて実験を行った。熟達度に応じた自動詞の過度受動化だけでなく受動態の過少使用の結果も報告し、3要因に加えて教科書からのインプットなどの要因も含めて考察を試みる。

⑧ 日本人大学生における現在分詞の用法理解と和訳の関係—主節の内容を意味上の主語とする用法に着目して—

高松 龍 (東京大学大学院生)

区分:自由研究 対象:大学

本研究は、日本人英語学習者にとって主節の内容を意味上の主語とする現在分詞表現(以下 SPC)の文法項目上の認識が、SPCを含む文の意味理解にどの程度影響するかを明らかにすることを目的とする。日本人大学生を対象とした、和訳とV-ing形の用法を問う調査の結果、想定解選択の有無と和訳の精度の間に有意差は認められなかった。従って、SPCを含む文においてV-ing形の文法項目上の認識は意味理解の精度に有意に影響しないことが示された。

⑨ 階層ベイズモデルによる日本語を母語とする英語学習者の前置詞に関する学習困難性のモデリング

木谷 美彩 (県立広島大学大学院生)・草薙 邦広 (県立広島大学)

区分:自由研究 対象:一般

本研究では、前置詞に関する文法学習・指導の一助となり得る基礎的資料の提供を目標として、日本語を母語とする英語学習者(N=32)の文法性判断データの分析を実施した。階層ベイズモデルによって(a)前置詞(on, it, at)と用法(抽象, 空間, 時間)からなる言語的要因、(b)メタ認知的弁別性を示す第二種課題結果、そして(c)実験参加者の熟達度を統合的に分析したところ、各要因の複雑な交互作用を見出した。

⑩ 分詞による後置修飾はなぜ難しいのか—名詞句把握を困難にする要因の考察—

伊藤 賢佑 (東京学芸大学附属高等学校)

区分:自由研究 対象:大学

名詞句構造は日本人英語学習者にとって習得が困難であることが報告されており、分詞による後置修飾に関しても十分とは言えない定着状況が観察されている。本研究では、「関係代名詞のような修飾構造の存在を示すマーカーが分詞内に存在しないこと」を名詞句把握を困難にしている要因と仮定し、マーカーの有無による名詞句把握への影響を調査した。分詞と関係代名詞・主格を比較しながら結果を報告し、教育的示唆を論じる。

A42 講義室 【言語政策・教育制度・教員養成・教師教育】

⑥ 大学カリキュラム改定のエスノロジー

神白 哲史 (専修大学)・近藤 睦美 (甲南女子大学)・平井 愛 (神戸学院大学)・吉川 りさ (名古屋工業大学)

区分:自由研究 対象:大学

「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)」(2018年11月26日中教審)以後、各大学においてカリキュラムアセスメントの必要性が高まっているが、それらのノウハウの情報共有が依然として不足しており、各大学における手探り状態が続いている状況にある。本研究は、カリキュラム改定に係わった大学教員の経験談を半構造化インタビューにより集め、そのエスノグラフィーを集積・共有することを目的としている。

⑦ A Matching Survey of Local Government Needs and Students' Interests to Community-based English Activities

GOTO, Takaaki (Kyushu University of Nursing and Social Welfare)

区分:自由研究 対象:大学

This research examined how local government needs matched university students' interests regarding community-based English activities for people from other countries in a prefecture. Although the most popular activity of all government needs among the students was a cultural exchange event, which only exceeded 50%, there sure was a gap between local government needs and students' interests.

⑧ How is globalization experienced in the countryside: An Examination of English Education in Rural Hokkaido

NAKATSUGAWA, Masanobu (Sapporo International University)

区分:自由研究 対象:一般

This study focuses on the JET Program, which aims to introduce globalization to rural areas, and examines how ALTs are treated in small villages in Hokkaido through questionnaires and interviews. This presentation will take a critical look at whether the program is contributing to the realization of globalization.

⑨ 教職課程における小学校英語授業実践のための英語使用力育成に関する研究—授業動画観察が与える影響の検討—

小柴 和香 (四天王寺大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、小学校英語授業実践に必要な英語使用力育成の一環として、実際の授業動画観察の有無が学生の模擬授業での英語使用に与える影響を比較分析した。学生による模擬授業動画をデータとし、使用された英語を児童の理解や、やり取りを促進する観点から分析した。結果、授業動画の観察は学生の英語使用力向上に有益であることが示唆され、特に、児童の興味を引き、関与を促すような発問において、その効果が顕著であった。

⑥ 英語科教員志望学生を対象にした、英語による「発表」「ディスカッション」活動の実践

巽 徹 (岐阜大学)

区分:自由研究

対象:大学

教職科目「英語コミュニケーション」の授業において、英字新聞の記事内容を整理してペアで発表したり、発表した内容についてグループでディスカッションをしたりする活動を行った。これらの活動を通して、受講生がペア・グループ活動に対してどのような意識を持ち、何を重視して発表を行っているのか、また、将来の英語科教員としてどのような英語使用が望ましいと考えているのかについて調査した結果を実践内容と共に紹介する。

⑦ 若手英語教師の自己リフレクションによる授業改善と実践理論の形成

岡崎 浩幸 (富山大学)

区分:自由研究

対象:中学校

本研究では、2名の若手教師に授業後、授業改善のため、日誌形式で10回程度自己リフレクションを行ってもらった。リフレクションの特徴は、生徒の視点から授業を振り返ることと、手ごたえのあったことを記述することであった。研究の目的は2点あり。若手教師のリフレクションがどの程度高次のレベルに達するのか、今回のリフレクションを通じて、どのような独自の実践理論を獲得しているのかを明らかにすることである。

⑧ TEA(複線径路等至性アプローチ)を用いた英語教師の成長の分析—教職大学院の学生の成長の課程—

渡邊 大志 (横浜国立大学大学院生)

区分:自由研究

対象:一般

質的研究のアプローチの一つである TEA(複線径路等至性アプローチ)を用いて、1人の英語教師の成長過程を分析した。インタビューによって得られた情報を基に、時間を捨象せずに人の発達を描くことができる TEM(複線径路等至性モデル)を用いて図を作成した。そこから、授業実践直後の先輩教師や指導教官からのフィードバックによって、自分だけでは得られなかったであろう気づきや学びが成長に寄与していたことがわかった。

⑨ 英語科教職課程における指導教員のメンターの役割—J-POSTLとALACTモデルを活用した省察的实践を通して—

大崎 さつき (創価大学)・西方 美佐 (創価大学大学院)

区分:自由研究

対象:大学

英語科教職課程において、模擬授業に対するフィードバックによっては教職生の省察が深まらない、あるいは教職生が批判と受け取る可能性がある。指導教員がメンターの役割を意識することで、教職生が「反省」ではなく「省察」することを目標とした省察的实践を試みた。本発表では、ALACTモデルの「8つの質問」などを活用した継続的なフィードバックが教職生の省察にどのような影響を与えたかを分析した結果を報告する。

⑩ タスクを志向した論理・表現授業におけるベテラン教師と実習生の授業の比較

中山 穂乃花 (北海道遠軽高等学校)・志村 昭暢 (北海道教育大学)

区分:自由研究

対象:高等学校

高等学校の論理・表現の授業において、学習者の発信力を高めるために、タスクを用いた指導が試みられているが、ベテラン教師と実習生ではこれまでの授業実践の経験の違いもあり、その特徴が異なると考えられる。本発表では、ベテラン教師と実習生の同じ指導案によるタスクを志向した論理・表現の授業について、コミュニケーション性を測るために開発された授業分析の手法であるCOLTを用いて比較し、その違いを明らかにした。

A44 講義室 【ESP・小学校英語】

⑤ 日本人大学生の英語医学論文の読み取りと批判的思考態度の関係—文章構成と既知情報・未知情報に焦点を当てて—

清水 真紀 (群馬大学)

区分:自由研究

対象:大学

入学後間もない医学部生にとって、英語論文は未知の世界であり、そのリーディング及びライティング技能を身につけることは重要な課題である。一方で、学術論文は説明文等の一般的な文章とは構成も含め異なる点が多い。本研究では、論文読解において、生徒がどの部分で困難を感じているか、特に Introduction の文章構成、既知・未知情報の読み取りに焦点を当て明らかにすると共に、批判的思考態度との関係について明らかにすることを目的とする。

⑥ 生成 AI を導入した ESP 指導の実践—高専高学年における導入事例—

武田 淳 (仙台高等専門学校)

区分:事例報告

対象:高等専門学校

生成 AI はその応答内容の真偽を懸念する声が聞かれる一方、「壁打ち」「無限チャット」に代表される AI ならではの諸機能を称賛する意見も多い。筆者が ESP の指導に生成 AI を導入して一年になるが、プロンプトを工夫することで学生の学習進度や興味、またそれぞれの専門分野に対応した学習環境の構築が可能であることを実感している。特に効果的であったプロンプトを紹介すると同時に、より質の高い活用方について考えたい。

⑦ 児童の思考力・表現力・判断力を高めるためのパフォーマンステストと評価—タブレット端末を活用して—

高橋 美由紀 (愛知教育大学)・柳 善和 (名古屋学院大学)

区分:自由研究

対象:小学校

小学校のパフォーマンス活動において、タブレット端末を使用し、パフォーマンス発表の準備として行った、①個別最適化学習による発話練習、②絵や写真を用いて思いを伝える工夫、③「読むこと」「書くこと」の活動による原稿作成と順序だてて話す活動を基に、タブレット端末の活用が児童の思考力・表現力・判断力を高めるために効果的であったことについて、パフォーマンス指導と評価、及び児童の意識調査の分析結果から述べる。

⑧ CLIL の考え方を活用した小学校外国語科授業実践—児童のエンゲージメントに着目して—

大槻 眞子 (宮城教育大学大学院生)

区分:事例報告

対象:小学校

本研究では、小学5年生の児童67名を対象とし、CLIL(内容言語統合型学習)の考え方を取り入れて外国語科の授業を実践した。実践の結果、児童の全体的なエンゲージメントは高い一方で、感情的エンゲージメントは行動的・認知的エンゲージメントより低いことが明らかになった。また、主活動における抽出児童の発話から、エンゲージメントの高さと英語使用の関連が示された。これらの結果を、授業実践の具体に基づいて、報告する。

⑨ 小学校外国語活動・外国語科における児童のつまずきの調査—リスニングの難しさに焦点をあてて—

澤井 奈生子 (筑波大学大学院生)

区分:自由研究

対象:小学校

小学校中学年に外国語活動、高学年に外国語科が導入され、英語を楽しく学ぶ児童がいる一方で、英語に困難を感じる児童がいる。英語に慣れ親しみ基礎を学ぶ段階でつまずく児童がいる現状は注目すべきである。本研究では児童への事前調査の結果に基づき、特にリスニングに関する内容に焦点をあてたアンケート調査とインタビューを行い、児童の英語への難しさを調査する。児童のつまずきを知り、今後の指導法を採る契機としたい。

⑩ 小学生パフォーマンス・チャレンジ・コンテストにおけるスキット分析

柳田 綾 (桜花学園大学)

区分:自由研究

対象:小学校

第二回全国小学生パフォーマンス・チャレンジ・コンテストにおいて、24 作品のスキットの応募があった。スキットにおいて児童はどのような語彙や表現を使用しているのか、どのような思考力を働かせているのかを分析する。児童が使用している教科書と、スキットにみられる語彙・表現についても比較、考察を行う。また、指導していた教員にもアンケート調査を実施し、児童たちにどのような情意面での変化があったかを調査する。

⑥ 小学校外国語指導者が重要と思う指導内容・技能はどれほど実践されているか—指導者研修への示唆—

河合 裕美 (神田外語大学)・田中 真紀子 (神田外語大学) 区分:自由研究 対象:小学校

A 県小学校外国語スキルアップ研修に参加した担任・専科教員に指導内容や指導技能に関わる 60 項目について、「どの程度重要と思うか」また、それらを授業で「どの程度実践しているか」回答してもらった。その結果、重要だと思っているのにも関わらず、授業で実践していない項目が多かった。音に対応する文字の指導やお話を授業に活用する項目などはさほど重要視されておらず、小中接続の重要性に対する教師の認識不足が見られた。

⑦ 台湾 2 都市 4 小学校の英語の授業から学ぶもの

白土 厚子 (東京学芸大学) 区分:自由研究 対象:小学校

本発表は、2005 年から英語を教科として指導している台湾の 4 つの小学校で、2024 年 3 月に実施した授業観察と指導教員からの聞き取り調査をもとに、実施状況と教員の抱える課題を 2014 年の調査と比較しながら分析する。特に、英語を 3 年生から教科として導入することで、児童の英語力向上が図られる一方で、教室内の児童のレベル差や専科制の長所と短所といった視点から台湾の小学校英語教育を考察する。

⑧ 小学校低学年における英語教育カリキュラムの比較分析—市町村教育委員会に対する聞き取り調査をもとに—

青田 庄真 (茨城大学) 区分:自由研究 対象:小学校

2024 年度現在、日本の小学校低学年において外国語は学習指導要領上に位置づけがない。にもかかわらず、決して例外ではない数の地域・学校において何らかの英語教育が実施されているのが現状である。そのため、自治体や学校は独自にカリキュラムを作成していることが予想される。本研究では、市町村教育委員会に対する聞き取り調査をもとに、どのようなカリキュラムが、どのように作られているのかを明らかにすることを試みる。

⑨ 小学校英語教科書に見るジェンダー表象

石川 有香 (名古屋工業大学) 区分:自由研究 対象:小学校

男女平等は SDGs のひとつであり、我が国でも、学校教育全体を通じて、人権の尊重や男女の平等を重視し、男女共同参画社会推進に寄与する指導の拡充が求められている。英語教育においても教育目標のひとつとなる。小学校英語教科書は、主要な登場人物の男女数をほぼ同数にそろえるなどの工夫があるが、詳細に調査したところ、学校・家庭・社会における活動やイラストなどにおいて、ジェンダースtereotypeがみられることが分かった。

⑩ 児童の英語学習に関わる情意と学校外学習との関係

羽山 恵 (獨協大学) 区分:自由研究 対象:小学校

児童の英語学習に関わる情意要因として(1)外国語の授業に対する意欲・自信、(2)外発的動機づけ、(3)外国に対する興味・関心の 3 つを取り上げ、英会話教室や英語塾などの学校外での英語学習経験とこれらとの関係を探っている。あわせて、小学校における外国語科導入前(2017 年)と導入後(2022・2023 年)に収集したデータの比較も行っている。結果を踏まえ、家庭での取組と学校教育との連携の可能性について論じたい。

B34 講義室 【指導法】

⑤ 日本の中学校における Concept-based Instruction—概念型指導のネットワークへの参加呼びかけ—

溝畑 保之 (桃山学院教育大学)・岩田 慶子 (兵庫県神戸市立星陵台中学校)・

周藤 かおる (大阪府堺市立鳳中学校)・中田 未来 (大阪教育大学附属池田中学校)

区分:事例報告 対象:中学校

概念型指導は、「事実の理解」「スキルの育成」と重要な「概念的理解」を相乗的に働かせ、「転移」する汎用的な力の育成をめざす。国際バカロレアや新学習指導要領と親和性が高く、AI 時代を生き抜くための資質・能力の育成に資する。本発表では、3 名の中学教員の事例を紹介する。検定教科書を用い、協働学習を通じてお互いから学び、自分の考えや価値観に気づく。スピーキングあるいはライティング活動を位置づけ実施した。

⑥ デジタル時代における検定教科書を有意義に用いたラウンド制指導法の活用—小中接続を意識した中3段階の4技能5領域の向上に向けて—

黒川 愛子 (帝塚山大学)

区分:自由研究 対象:中学校

本研究の目的は、中学3年生段階での4技能5領域の向上に向け、デジタル教科書を含めた検定教科書の特長を活かし、ラウンド制指導法を用いて、いかなる授業改善が可能であるかを調べることである。本研究では教科書内の工夫を調べ、それらを活かしたラウンド制指導法の活用を探究した。結果として、ラウンド制指導法を用いることで、教科書内の統合的な活動をより効果的に活かす授業改善が可能であることが観察された。

⑦ 大学生スローラーナーの英語音読能力向上のための指導法の一考察—教師による個別フィードバックを用いて—

谷川 明代 (大阪成蹊大学)・安木 真一 (京都外国語大学・短期大学)

区分:自由研究 対象:大学

本研究では、英語が得意ではない大学生に授業で効果的な音読指導を行い、授業外の音読課題を課し音声提出させ、その音声に教師による個別のフィードバックを与えることにより、学習者の音読力と英語学習への動機は高まるのかを検証した。実践の結果、処置群の特に中位群・下位群の音読テストの伸びが大きい傾向があり、音読に多く取り組んだ群ほど音読の効果を実感し、今後も取り入れたいと考えていることが明らかになった。

⑧ パレスチナ問題を探求する授業をつくる—問いを考える—

柳川 浩三 (法政大学)

区分:事例報告 対象:大学

報告の目的は、パレスチナ問題を探求する一つの英語授業モデルを示し批判的に検証することである。喫緊の複雑な国際問題を英語による1次情報から考えることは、教室—生徒・学生—と世界をつなぎ、英語を学び使う動機と必然性となる。本実践では多様な媒体から事実を整理・分析し、対話型論証によって「問い」を探求させ、パレスチナ問題への見方の質的变化と英語による表現力の量的変化を追った。

⑤ student agency の育成を目指す授業づくりの試み—個別最適な学びと協働的な学びの視点から—

中島 義和 (今治明德短期大学/FC 今治高等学校里山校)

区分:自由研究

対象:高等学校

OECD Education 2030 プロジェクトの Learning Compass という学習の枠組みを参照した、student agency の育成を目指す英語科の授業づくりの試みを報告する。生徒は主体的に個別最適な学びの形を模索しており、教師は多様な学習者への支援や学び方の提示、協働的解決学習の課題設定等を通して新たな授業の形を模索し、試行錯誤を重ねている。生徒への調査から、その実態とニーズを見出し、個別の学びと協働的な学びの実践過程を通した student agency 育成の可能性を示唆した。

⑥ バックグラウンドノイズがリスニング再話課題に与える影響の検証

藤田 亮子 (順天堂大学)・平井 明代 (筑波大学)

区分:自由研究

対象:大学

バックグラウンドノイズが、リスニングとスピーキング統合的タスクであるリスニング再話課題に与える影響を検証した。日本人大学生 26 名が、リスニング時と再話スピーキング時に異なるノイズ条件下(リスニング(ノイズ有・無)+再話(ノイズ有・無))でリスニング再話課題を行った。結果、スピーキング時にノイズがある条件よりも、リスニング時にノイズがある条件において、学習者はノイズの影響をより受けた。

⑦ 丁寧な依頼に関するロール・プレイ型タスクを用いたフォーカス・オン・フォーム指導が日本人大学生の依頼戦略と仮定法過去の習得、情意的要因に与える効果

大山 廉 (茨城大学)

区分:自由研究

対象:大学

本研究では日本人大学 1 年生を対象とし、ロール・プレイ型タスク+明示的の文法指導と、ロール・プレイ型タスクのみ、明示的の文法指導のみの 3 種類の指導が、丁寧な依頼戦略の学習と仮定法過去の習得、仮定法過去の学習に対する情意的側面、英語学習におけるウェルビーイングに効果・影響があるかどうかを検証した。分析の結果、どの指導にも一定程度の効果は見られたが、指導効果の指標によって違いがあった。

⑧ インพุットフラッドと課題解決型言語活動を連動させることによる有効性の検証—「受け身」に焦点をあてて—

今井 典子 (高知大学)・多良 静也 (高知大学)・杉浦 理恵 (東海大学)

区分:自由研究

対象:中学校

言語習得には理解可能なインพุットが重要であることを踏まえ、本研究では、インพุットに焦点をあてた'input flood'の手法を用いたリーディング教材の提供、そして、それに連動させたアウトプットとして課題解決型言語活動を中学 3 年生対象に実施した。本発表では、実施による有効性の検証結果を発表する。検証結果を受けて、言語習得に効果的なインพุットとアウトプットを教室内で実現するための方策を述べる。

⑨ 「言語文化観のゆさぶり」による豊かな表現力の育成—対話型振り返りシートの構築をめざして—

曾我 治寿 (岐阜県多治見市立多治見中学校)

区分:事例報告

対象:中学校

本発表は、学習者の「言語文化観」(仲 2012)＝「言語文化に関するあらゆる事象を『どのように捉えるのか』という観点ないしは判断の基準」(同, p.49)にゆさぶりをかけてことばへの興味・関心を喚起し、豊かな表現力の育成を目指す実践の報告である。振り返りシートの内容を授業に反映する「対話型」の授業スタイルでのゆさぶりによる表現力の伸びを質的(感想用紙の記述)・量的(パフォーマンステストの結果)データから示す。

B36 講義室 【指導法・賛助プレゼン】

⑤ 「話す力」「書く力」を養い、言語活動を活性化するクイズ・クリエイティング活動の事例報告—苦手意識の変容プロセス—

矢野 隼人 (釧路工業高等専門学校)

区分:事例報告

対象:高等学校

本発表は、高校検定教科書を用いた授業で実施したスピーキング活動、クイズ・クリエイティング活動の事例報告である。この活動の目的は、1.学習者主体の「話す力」、「書く力」を養う言語活動を展開すること、2.言語活動に対する学習者の情意フィルターを払拭すること、3.学習者が既習事項を活かし、言語活動を継続することである。この活動のペアワークとプレゼンテーションの事例、そして、その効果について報告する。

⑥ 英語ライティング・プレゼンテーション指導とルーブリックの活用について

海上 順代 (東京都立産業技術高等専門学校)

区分:事例報告

対象:高等専門学校

発表者が所属する高等専門学校の専攻科生の本科5年次と専攻科1年次のライティング力とプレゼンテーション力の変化を検証する。本科5年の必修の「英語 V」では卒研の英文アブストラクト作成指導を行い、授業最終回で学生が卒研について英語プレゼンを実施している。卒業後、専攻科に進学し選択必修科「英語表現」を受講した学生のライティング・プレゼン力の向上を、受講時の受講者の自己評価の変化と関連付けて検証したい。

⑦ 英語プロソディと語彙知識の深さとの統合を図る指導実践

磯田 貴道 (龍谷大学)・鬼田 崇作 (同志社大学)・大和 知史 (関西大学)

区分:事例報告

対象:大学

外国語の語彙知識は「広さ」だけでなく、複数の語のつながりや句アクセントなどの音声面の知識も含めた「深さ」も重要である (Schmitt & Schmitt, 2020)。本発表では、大学生を対象とし、語彙項目の導入として句を単位とすることや、リズムを意識した音読、リテリング等の活動を通して、英語プロソディと語彙知識の深さとの統合を図ることで、指導項目の定着を目指した授業についての実践報告を行う。

⑧ 【AI 搭載】e ラーニングの新たな機能・サービスのご紹介—スピーキング力アップへのご活用—

井上 大輔 (EdulinX)・綾仁孝道 (EdulinX)・練木 翔 (EdulinX)

区分:賛助プレゼン

対象:一般

EdulinX は、英語 e ラーニングやグローバル化研修などを創業以来 20 年以上にわたり提供し、大学をはじめとした 290 校以上の教育機関での導入実績があります。この度、AI 技術を搭載した発音採点アクティビティを e ラーニングに追加し、また AI を用いたスピーキングのアセスメントテストもリリース！スピーキング力アップにもよりご活用いただけるようになりました。その機能のご紹介と、活用方法のご提案をいたします。

⑤ My Challenges Based on the TANABU model in English Communication

IZUMITANI, Tadashi (Kindai University Senior & Junior High School)

区分:事例報告

対象:高等学校

This presentation will report how I teach in English Communication, following the TANABU model (Kanatani & Tsutsumi, 2017), to second-year senior high school students at a private school in Osaka. I would like to share my challenges and what will be revised in the future lessons.

⑥ 遠隔地の生徒との話し合い活動の実現と生徒の学びについて—生徒を夢中にさせるリテラチャー・サークルの交流学習—

立松 大祐 (愛媛大学)・折本 崇 (愛媛県伊予郡砥部町立砥部中学校)・和家 加奈 (愛媛県松山市立東中学校)

区分:事例報告

対象:中学校

英文を読んでグループで話し合う言語活動の一部を、遠隔地の中学3年生と実施したオンライン交流学習のプロセスと両校生徒の学びについて報告する。クラスでの活動では生徒は英文のテーマを自分ごととして捉え、夢中で話し合いの準備をし、意見交換する様子が観察された。交流学習では、国際協力について、クラス内の話し合いでは見られなかった異なる視点での意見のやり取りがあり、両校の生徒の英語による学びに深まりが見られた。

⑦ 「疑問バンク」で育てる英語を探究する力

中井 康平 (千葉大学教育学部附属中学校)・川名 隆行 (千葉大学教育学部附属中学校)・

見目 慎也 (千葉大学教育学部附属中学校)・山崎 達也 (千葉大学教育学部附属中学校)・西垣 知佳子 (千葉大学)

区分:自由研究

対象:中学校

通常授業は教科書を使って集団指導で進む。その中で生徒は、言語材料や教科書題材に関して様々な疑問を抱く。本実践では、授業を通して生徒に沸いた英語に関する疑問を各自の「疑問バンク」に蓄積し、各課の最後に設けた「探究の時間」に、インターネットを利用し、教師の支援を受けて、自由な方法で回答を得るようにした。本発表では、こうした取り組みの授業のプロセス、生徒の探究の様子、育った探究力について報告する。

⑧ 5ラウンドシステムの授業を通じて生徒の発信力はどうのように伸びてゆくのか？

山本 丁友 (神奈川県横浜市立本牧中学校)・西村 秀之 (玉川大学)

区分:自由研究

対象:中学校

本研究の目的は、5ラウンドシステムの授業を通じて生徒の発信力はどうのように伸びてゆくのか、を実践から明らかにすることである。昨年度までの語彙や表現の変容から継続し、2、3年次での教科書の同一ユニットの4月と2月に行ったリテリングの計4回分から正確性を分析。先行研究などから中学生にとって即興での発話で課題の見られる「主語+動詞」に着目し分析したところ、いくつかの傾向にあることが分かった。